



〈下〉

橋田壽賀子（はしだ　すがこ）

1929年、京城に生まれる。

日本女子大、早大卒業。松竹脚本部を経て、フリーの脚本家となる。

代表作「あしたこそ」「つくし誰の子」「たんぽぽ」ほか。

ゴールデンアロー賞放送賞、放送文化賞、テレビ大賞優秀個人賞、パ
イオニア賞等受賞。

主な著書『四季の家』

『となりの芝生』

『夫婦』

『ほんとうに』

道（下）

1979年7月5日　初版発行

著者——橋田壽賀子

発行者——吉田　稔

発行所——株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1　秀和三番町ビル

郵便番号102　電話（03）230-0311

振替東京1-131334

印刷——株式会社祥文堂

製本——小高製本工業

©Sugako Hashida, 1979

0093-118002-4968

落丁・乱丁本はお取替えいたします



〈下〉

道△下▽·目次

第十九章 結婚賛成の条件

第二十章 夫婦きどり

第二十一章 姑根性、嫁根性

第二十二章 幸せになりたい

第二十三章 裏切り

第二十四章 さよなら母さん

第二十五章 母さんの孤独

第二十六章 別れるとき

第二十七章 花婿は来たけれど

第二十八章 嫁、姑の行き違い

7

19

32

45

57

69

81

94

105

117

第二十九章	干渉しないで	129
第三十章	娘たちの秘密	142
第三十一章	母さんの怒り	152
第三十二章	長女のお見合い	163
第三十三章	幸せならば……	174
第三十四章	結婚しません	184
第三十五章	好きな人います	196
第三十六章	嫁の覚悟	205
第三十七章	嫁と妻の間	219
第三十八章	それぞれの道	230

TBS系テレビドラマ「道」より

第十九章 結婚賛成の条件

従業員の長子ちやうこの家出は、主人のわかに少なからず衝撃を与えた。嫁の亜紀あきがせっかくもどってきたというのに、それと入れ替わるように置手紙を残して出ていってしまった。他人というものの扱いの難しさを、わかち改めて感ずるのだった。血のつながった福太郎ふくとろうや高子こうこたちの扱いもやっかいなことではあるが、それでもまだお互いに言いたいことを言い合うこともできる。それが、亜紀もそうだが、長子のような他人となると、互いにどうしても、ある壁のようなものができて、ざっくりばらんに話し合えないことがある。そして理解し合おうとする互いの努力が、かえってマイナスの要素となつて意思の疎通を欠き、感情の行き違いを生じてしまう。長年の客商売で、従業員を指図してきたわかのような人使いのベテランにとつても、それはかなり難しい問題であつた。

長子の家出について、わか以上に心を痛めたのは朋子ともこだった。高子や周子しゅうこは相変わらず無責任に、「朋子がいけないのよ、余計なことをするから」

などと言うのである。余計なこととは、亜紀に家の中のことをすべて任せ、店の手伝いをしたときにはそれなりの報酬を支払うべきだと、先日、提案したことである。

「私が間違ったこと言ったとでもいうの」と朋子は、姉たちにきつく反発した。「私は当然のことを主張しただけよ。母さんだってわかってくれたから、亜紀嫂おえさんを立てて、伊和田いわたの所帯だって任せるつもりになったんじゃないの。それくらい気を遣ってあげないと、お店をやってるうちのお嫁さんなんて、気の毒だよ。もし、亜紀嫂さんが働く分、人を雇ったら、それだけ費用がかかるわけじゃない」

「お嫁さんなんてね、人を雇わなくてもいいようにもらうものなのよ」

と高子が、あまりにもはっきり言うので、朋子は啞然とした。高子は、それが日本人の常識だと言うのである。

「よくも、そんなひどいことが言えるわね、明治や大正じゃあるまいし」

「あんな、二言目には亜紀嫂さん、亜紀嫂さんと言うけど、まわりの人間のことだって考えなきゃあ……」と今度は、次女の周子が出してきた。「長子ちゃんは使用人かもしれないけど、亜紀嫂さんが家を飛び出してから、だれがこの家を切り回してきたと思ってるのよ。長子ちゃん一人で頑張ってくれたのよ。だのに、亜紀嫂さんが帰ってきたとたんに、亜紀嫂さんばかり甘やかすようなことされてごらんよ。一所懸命やってきた人間は、ばかばかしくもなるわよ」

わかが間に入って、娘たちの口論をやめさせたが、長子の家出は、当然、従業員たちにも波紋をなげかけていた。だが、子供ではないのだし、それに置手紙までしていった覚悟のうえの家出なのだから、それほど心配することはないだろうということに落ち着いていた。

数日たっても、長子からはなんの連絡もなかった。いくら気にいらなはいとはいえ、七年間も住み込んで働いてきた家である。それに荷物も残っているし、電話ぐらいかけてきてもよさそうなものではないかと、「伊和田」のだけれど、そう思っていた。

五日後、わかはずいに心配になって、長子の故郷の家に電話を入れた。長子の祖母が出てきた。わかには長子の家出は言わずに、それとなく向こうの様子を探ったのだが、その受け答えぶりから考えて、長子が実家にもどっている気配はなかった。「伊和田」を出たということも、先方では知らないようだった。

それでは、どこへ消えてしまったのだろうか。新しく仕事を探すと置手紙には書かれていたが、首尾よくよい仕事にありつけただろうか。あるいは、悪い人間にだまされてはいしまいか、病気にでもなっていないだろうか、あれこれ考えると、七年余り、責任をもって預かっていた娘だけに、わかには心配で夜もおちおち眠れないほどだった。

亜紀もまた、長子の家出を気にしていたが、女の直感で、もしかしたら、自分が帰ってきたのが原因ではないかと感じていた。長子が福太郎に好意を抱いていたことも、また長子ばかりか、若後家となっている時江^{ときえ}だって福太郎に好意を抱いている。福太郎にそれを言おうと、なにをばかなことを……と、笑ってとり合わない。

「やぎもちやいてんじゃないのよ」と亜紀は言った。「哲^{てつ}ちゃんのパパはいないんだもの。あなたが哲ちゃんをふびんがって面倒みるのも、時江さんがあなたを頼りにするのも当然のことだし、私だっ

てそんなことなんとも思つてやしないわ」

「だったら、くだらんこと言うのはよしなさい」

「私、時江さんにも長子さんにも悪いことしたと思つてゐるの。私、伊和田を出たときから、もう伊和田に帰ることがなかったら、あなたが時江さんか長子さんと一緒になつても仕方がないって……」

「冗談にも、そんなこと」

と福太郎は怒つたが、真実、亜紀はそう思つたことがあつた。そして、自分がそう思うくらいだから、当然、長子や時江もそう思つたはずで、率直な長子は時江のように気持ちを抑制できずに、家出という形をとってしまったのだ。ほかの、いろいろな理由も重なつてはいようが、福太郎への好意が亜紀のもどつたことでうちくだされたことが大きな原因となつた。亜紀は、確信ありげにそう言うのだった。

しかし、仮にそうだととしても、今更、どうこうできる性質のものではなかつた。

「家族や使用人のなかで暮らしていくというのは、やはり大変なことなんだな。すまないと思つてるよ」

福太郎は、亜紀を慰めるように言つた。福太郎自身、いつまでもこのままの状態でいるつもりはなかつた。「伊和田」を継がないと決めた以上、いつかは出ていかなければならないが、それにはタイミングというものがあるのだ。

「そう長いことじゃないよ。そのときまで、なんとか辛抱してほしい。おれを信じてくれ」

福太郎は、亜紀の肩を優しく抱き寄せて言った。

みんなが長子のことを心配しているのに、長女の高子だけは無関心だった。高子の関心は、もっぱら、克利に注がれていた。偶然にも自分が発掘した将来性のある素材である。なんとか、人気のある歌手に育て上げたかった。

この日は克利がレコード会社のオーディションを受ける日であり、高子は緊張していた。成功を祈って、高子は克利とブランドーで乾杯をした。居間に入ってきたわかたちに、高子は得意気に言うのだった。

「これからが勝負よ。うちの事務所でも、久しぶりに期待のもてる新人だって、みんな張り切ってるんだから」

しかし周子は、もとはといえば自分の教え子に対する高子のやり方に不満だった。

「あのときは、長谷部君もひどく動揺してたし、なにか打ち込めるものがあったらショックを乗り切れるかもしれないと思って、長谷部君の好きなおりにさせたけど、プロの歌手にするつもりなんて、全然ないんだから」

一年留年したが、四月からはまた学校にもどり、来年の大学入試に備えて勉強しなければならないと、周子が言った。だが高子は、

「今頃になって、そんな」と、目をむいた。

「克は何もかも承知して、プロの道を選んだのよ。だから私だって、できるだけのことで……。ここまでくるのにどれだけ費用がかかってるか、あんた、わかっているの。今更、あとへはひけないのよ」

「でも、大学を受けさせるのは、長谷部君のお母さんとの約束なのよ」

「なにが大学よ。大学出てなきゃ生きられないと思ってるなんて、愚劣な偏見よ。あんたみたいな教師がいるから、若者がスポイルされるのよ。彼がプロになる決心したんだって、そういう母親や教師の押しつけがやりきれなくなったからじゃないの。少しは反省したらどうなの」

高子はそう言い放つと、克利を連れ、居間を出ていってしまった。

亜紀がもどってきて、**「伊和田」**随一の働き手である長子が抜けたため、店では相変わらず人手が足りなかった。まだギブスもとれない洋は、ひとり店のすみで、絵本を読んだりして時間をつぶしている。

久しぶりで**「伊和田」**を訪れた郁は、確かに不満を言った。

「洋ちゃんのギブスがとれない間くらい、亜紀さんはお店に出さないで、朋ちゃんや周子ちゃんたちに手伝わせたらいじゃないの。亜紀さんが帰ってきたからって、また勝手なことさせてるんじゃないの」

「言って、きくような子じゃありませんよ」

「あんた、母親でしょう。しっかりしなさいよ。亜紀さんが跡を継ぐつもりになってくれたとでもい

うのならともかく、その気がないんだったら、高子ちゃんたち三人のなかのだれかに継がせるよりほかにないのよ。それが決まらなきゃあ、福ちゃんたちだって出ていくにも出ていけないじゃないの。

伊和田を継ぐつもりのない人を、いつまでもこの家に縛りつけとくわけにはいかないのよ」

「それくらい百も承知してますよ。けど、今すぐ決められることじゃないでしょう。三人とも好きなことしてるし……」

「それがいけないのよ。少しくらい強引でも、言うことかせなくちゃあ」

「なによ、ひとのことだと思って」

わかは、少し声を荒らげた。

「ひとのことじゃないわよ。伊和田は私にとっても、大事な店なんですからね」

「私はね、子供たちにその気がないんだったら、いっそ、長子ちゃんを、だれか適当な人と一緒にさせて、任せてもいいと思ったこともあったのよ」

しかし、その長子が家を出て、どこにいるのかわからない。長子の家出を知って、郁は驚き、呆れ、

「この家も、よくよくついてないのねえ」

と、わかと顔を見合わせた。

この日、末娘の朋子は、学校の研究室にアルバイトに行き、周子は大坊吾郎と会うために外出した。約束の喫茶店に現れた吾郎を見て、周子は思わず吹き出してしまった。片方の目の周囲が黒くアザ

になっていて、まるでパンダのようだった。教え子の生徒と喧嘩して、殴られたのだという。

「いったい何が原因で」

「くだらんことです。卒業するやつらのなかで、数学でいじめられたって連中に呼び出しかけられましてね。三年間のうっぶんを晴らしてやるって」

そんな呼び出しを受けて、一人でノコノコ出掛けていくのが、また、吾郎らしかった。しかし、相手は五人、こちらは一人だから、いくら腕に覚えがあるといっても、分は悪い。派手な立ち回りの末、たたきのめされたのだという。

「けど、なんだかスカッとしました。連中もあととはさっぱりしたもんです。お互いに気持ちよく握手して別れました」

吾郎は上機嫌に言って、笑った。

周子は、そんなスカッとした性格の吾郎が好ましかった。

それから、若い二人の教師は、受験体制のなかで苦しむ生徒の問題や、教育のあり方などをしばらく語り合った。

「人間を計る物差しが狂っちゃってるんですよ。大学のランクが人間の価値を決めるなんて、こんな愚劣なことはありやあしない。社会が悪いっていうけど、もっと悪いのは、親や教師ですよ。大学へやらなきゃ子供の未来はないと信じてる親や教師がいるうちは、どうしようもないな。社会よりも何よりも、まず、親や教師から考え方を変えていかなくちやあ……」

周子は、吾郎の言うことが耳に痛かった。自分もまた、そういう教師の一人ではないのか。

「周子さんは、進学校の教師に生きがいを感じてるんだから、それはそれで……」

と吾郎が慰めるように言ってくれたが、

「なんだか、辞めなくなっちゃった」と周子は、悲観したように言うのだった。「今の高校……東大へ何人入れたとか、私立の有名大学に何人合格させたとか、それが勲章になってるんだもの」

「ねえ、パチンコしませんか」

と吾郎が、急に話題を変えた。

「パチンコ？」

「ええ、ストレス解消にはいちばんですよ」

「私、したことないの」

「だから、連れていきたいんだ」

周子が吾郎に送られて「伊和田」に帰ったのは夕方で、店の準備や夕食の仕度でいちばん忙しい時刻だった。学校が春休みだから、周子の手伝いを期待していたわかカンカンだった。上機嫌で玄関に入ってきた周子に、いきなり怒鳴りつけた。

「どこへ行ってたの。行き先も言わないで、こんな時間まで。今、うちは、人手が足りなくて困っていることぐらいわかってるんだろ」